

# 花うぐい

森岡 正作

## 苗代寒

また亀を見に来てしまふ春の昼  
花吹雪生家も墓も失ひて  
産卵の刻を渦なす花うぐい  
春の海羽化と見紛ふ帆を浮かべ  
滑りよき朝のカーテン夏来る  
競り人の顔の尖りも初鯉  
静かなる学習塾や花は葉に

苗代という季語は傍題に苗田、苗代田、苗代時、苗代寒がある春の季語であるが、今はもう使うことが無く、昭和の途中までの季語である。登四郎先生の御句に「苗代寒いまだ手つけぬ田もありて」があったので触れておきたい。苗代田は苗を育てるだけの田で、水の張った田の一面に種籾を蒔き、三十センチ位まで伸ばす。その苗が伸びるまでに他の田圃は牛馬が耕し、次に代掻きなどをして置かなければならない。それなのに手をつけていない田圃があることを、先生は「苗代寒」をもって憂えたのである。

今は牛馬ではなく機械化の時代である。縦三十センチ横五十センチ位の薄い箱を地上に並べ、その中に蒔いた籾が十センチ位の苗に生長すれば田植えが出来るのである。少年時代の田植えは「結い」として親戚が集まり、畔に牛馬を憩わせている横で昼のおにぎりや餅を食べたものであった。そんな合間に苗代田に入ったりしたのであるが、その時の泥の温もりの感触は、未だに足の指先に残っているような心地良さであった。